継嗣有らざるを憂む。皇子等をして膳職と為して。他氏人等を相交へて膳職の業をを。亂ることなきまをしとなり。この朕王子等爭志天云と詔ひしは王子六藉命と詔ひしを敬命をなりはしめ給ふなり

和加佐乃國波。六鴈命。永久子孫等可遠世乃國家止為止定天授介賜天支。此事波世々、仏過刑違志。

一本和字脫こり

○國家止為止和加佐乃國を。若狹國なり。定天授介賜天支。こゝ既に六鴈命にこの國を賜ひて。永く領きて子孫の家地と為らしめ給ひ。さて其國を授めひらまし

趣を推考るに。當昔少なくて國毎に。必國造を置きゝ

りともなしたえをきゝ。但し第一章に。東方諸國造十二氏と見えたれども。東國も然なりしなり。總て古國造乃在狀を。國造本紀。その他の古書どもを參考て。別に注せる稿あり。後に書とし此狀御世の在狀にして。かゝる命をなりしなる屋し。さて其國家なるのに住て在屋きにあらざれ共。常に遊息まし。免ぬ宮殿なる屋。はく六鴈命の子孫も相續て。若狹國を領きをりしと聞えたる事は證て。書紀履中卷に。三年冬十一月丙寅朔辛未。天皇泛両枝船于磐余市磯池。與皇

紀各分兼而遊宴膳臣余磯献酒時櫻花落于御盞天
皇異之則召物部長真膽連詔曰是花也非時而来其
何處之花矣汝自可求於是長真膽連獨尋花獲于掖
上室山而献之天皇歓其希有為宮名故謂磐余稚櫻
宮其此之縁也是日改長真膽連本姓曰稚櫻部造又
號膳臣余磯曰稚櫻部臣古事記同御世段に。此御世於若櫻部臣等賜若櫻部名
云こと見えたり。この余磯とは以前不え。國造本紀ニ。若
狭國造遠飛鳥朝御代。允恭膳臣祖佐白米命兒荒礪命
定賜國造と見えたるも荒礪命なりとて。余磯荒礪字の異なるハ
古書に此六鴈命の後なる歴きてと決く。允恭天皇の
例系なり

御世におよびて。更めて國造と稱ふに定賜ひたまひ
しなり。さて其余磯が賜ハりたる嘉号の。稚櫻部と
云ふを。もとより領れる國名にも改めて。和加
佐と。稱ふこととはなりしなるまでであるならむ。其もとり前の國名も今考にいふ
ふべき由あるし。さて又若櫻を和加佐とも云ふ隠る
例。その鎌の條に此事ども。委しくさきまき讃何まて委し
き考なきど。読長氣れも然にも尽されし。其も若狭旧
事考に云へり。又和名抄因幡國八上郡若櫻と云ふハワ
ありて。ワカサクラと假字をさゝれど。国人ハワ
カサと云へり。今鳥取の城下町の名にも若櫻町と
いふもありて。ワカサチといへり
と。その国人驚見安歓いへり志らきむ。こゝ
の詔詞に和加佐國と有るも。例の後には國名改めき
らして。唱變せりしもれなり〇此事波。上のくだり

此事をふり○世々公之て。後の御世々々に至まて
もなり。之を辞助まて。世々尔とふふま。深く意を入さ
るあるかひなりてきこゆ。因ま云ふ。之を文の類を助加ふる辞とやはすと
云ひあらて。上の言に餘きるを文詞の調を。又加ふる辞とふきこまと
ゆまば。をけ辞とやはすて。その意詞を。但しそふる辞とはいを
深きと浅きがなりて。その詞の餘意調のまもこ
に加へさるがざとまきこのゆきと。然まて○
へあらじ。をくあぢはひ悟る屋き事まて。大自誓
過剰違傍志。この詞連ら祢をて意得べし。
むまへまざとき意の御詞なり。中昔の武家下文に。
此志
相違者世など書るまれの件所領。永代不可有
辛知太比吉久膳職乃内毛外毛護守利太比家患乃
相違なる意の文なり
事等毛死久在志給太戸度思食。宣太麻天皇乃大御
命乎。良麻虚川御魂毛聞太戸申。止宣太麻
此志乎。志て尋常のざとく古々呂邪之ゆゑもむ屋。
心の指向ゆ由ゆ言なり○吉久て宜く所り○膳職
乃内毛外毛護守利太比。護の下一本利字なり。又一本比を天と作る。共に誤な
り膳職の内外を守護ゆ屋ゆへとふり。續紀十六卷
の詔詞に。朕乎守多比。十七卷の詔詞に。殿門荒穢須
事死久。守川川在自之事。伊穢之美字辛賀斯美志不
給。○家患乃事等毛死久。家患字をみゐ屋し。誤字な
ふべし。強く考ふる。家て宮の訛ならむか。又宮ゆは

ふるなはゞ御家なれむ。家と書て美也とをみを
次屋書きむ。ふむ良く美也とをゝゐあゐ屋し一本家忠
と作きゝど。忠を誤写なるべき事ならば○在志女給太戸。
著をきむ。論ふまむも何給を彼方ゐ係ゐる黨辞。太戸を賜べゐて。此方ゐ受
て賜ハらむと云ゐる言ばゐ充ゐり○虚川御魂。川
字一本脱ゐを。此虚川御魂のさゝば。上の幸上れと
と詠ゐ値を云ゐり○聞太戸止の太戸を一本奈の
一字ゐ作なをゐて誤ゐり

第三章

此章も。本朝月令六月十一日神今食祭事の下に。高
橋氏文云ゐて載ゐり。此を第二章ゐ論へゐばとく。
延暦十一年に。素をり在来ゐる氏文ゐ。書副ゐるを
ゝなり

太政官符神祇官。定高橋安曇二氏。供奉神事御膳行立
先後事

秘抄六月神今食事の下ゐ。此氏文を引て。太政官符
云。定高橋安曇二氏云と事とこの題目十八字を載
ゐり

右被右大臣宣�palm奉勅。如聞先代所行神事之日。高橋朝臣等立前供奉安曇宿祢等更無所争。但至于飯高天皇御世。霊亀二年十二月神今食之日。奉膳従五位下安曇宿祢刀語典膳従七位上高橋朝臣手具須比。曰。刀者官長年老。請立前供奉

飯高天皇ゝ御諡元正天皇○奉膳ハ。職員令ニ。奉膳二人。掌摠知御膳進食先嘗事。續紀ニ神護景雲二年二月癸巳。勅准令以高橋安曇二氏任内膳司者為奉膳。其以他氏任之者。宜名為上。式部式云。内膳司長官。高橋安曇二氏以外為上○典膳ハ。職員令内膳司奉膳の次ニ。典膳ハ人掌造供御膳調和庶味寒温之節

此時手具須比答云。神事之日供奉御膳者。膳臣等之職。非他氏之事。而刀猶強論手具須比不肯。如此相論聞於内裏。有勅判。累世神事不可更改。宜依例行之。自今以来无有争論。至于宝亀六年六月神今食之日。安曇宿祢廣吉強進前立。與高橋波麻呂相争。梲却廣吉。事畢之後所司科祓。于時波麻呂固辞無罪。何其為祓。是言上聞。更有勅判。上中之祓科廣吉訖。其後廣吉等妄以偽辞加附氏記。以此申聞自得為先。因茲高橋朝臣等雖不敢披訴。而憂憤之状稍有顕出。去延暦八年為有私事各進記文。即

嗅二氏勘問事由兼搜檢日本紀及二氏私記及知高橋氏之可先而事經先朝不忍卒改思欲一先一後彼此無憂雖未勅所司而每臨祭事宜知二氏遍令先後而今内膳司奉膳正六位上安曇宿祢継成去年六月十一月十二月三度神事頻爭在前猶不肯進仍勅應遍先後之狀比来頻已告訖宜此度依次令高橋先而継成不奉宣勅直出而退竟不供奉為臣之理豈如此乎宜暫故事以定其次兼論所犯准法科断者謹案日本紀卷向日代宮御宇天皇彦忍代別天皇五十三年巡狩東國渡淡門是時聞覚鴛鳥之聲欲見其形尋之出海中仍得白蛤於是膳臣遠祖名磐鹿六鴈高橋祖也以蒲為手纏白蛤為膾而進之故美六鴈臣而賜膳大伴部檢其家記畧同於此是高橋氏預奉御膳之由也及軽島明宮御宇誉田天皇三年處處海人訕呰之不従命乃遣安曇連祖大濱宿祢平之日為海人之宰是安曇氏預奉御膳之由也

先朝ハ光仁天皇の御世○誉田天皇ヒ御諡應神天皇○處々海人訕呰之不従命云ヒ。書紀應神卷ホ。三年處々海人訕呰之不従命則遣阿曇連祖大濱宿祢平其訕呰因為海人之宰。古事記ヨ阿曇連等者綿津見神之子宮都志日金拆命之子孫也。姓氏録ヨ。安曇宿祢海神綿積豊玉彦神子穂高見命之後也。ヤ安曇連綿積神命児穂見高命

之後
也
見えざるのみまて。御膳の事に與る屢き由
緒も見えぬ。古書どもまも見え侍るすなし。此氏
ハ海神の子孫なるから。因り海人の事に與まる
まりて。其訓呢を平章し免ぬ。さらに掌と為ま
ひ侍りしふべし。海人ハ魚を捕まて御饌の料に
奉るものなり。其を掌まる由縁にもりてなる歟
し但し上に引注ごとく。大嘗祭式に。伴造燧火。
歟炊御飯。安曇宿禰吹火とミえ侍り。いかふる由
なりての事ふるまる。
伴造ハ膳大伴造ふり
又安曇宿禰等歎云。御間城入彦五十瓊殖天皇御世。已
等遠祖大榜成吹。於奉御膳者。仍検其私記文。追註行下
筆。迹殊拙。不慮字。詐之端於是見矣。然則考之國史求
之家記。磐鹿六鴈。委質於前。大濱宿禰。策名於後。時經五
代。歳逾二百。相去懸遠。更无可疑。先後之次。事已灼然。理
須以高橋為先。安曇在後。又継成固執偽記。臨事爭先。恣
意進去。遂不供奉。不承詔命。無人臣礼。此而不正。何以懲
後。仍案職制律云。對捍詔使而無人臣之礼者。絞。名例律
云。對捍詔使而无人臣之礼者為大不敬。又云。犯八虐獄
成者除名者。今継成所犯准犯依律處絞刑。令除名。謹具
狀奏聞者。奉勅宜宥其死。以處遠流。自餘依奏者。官宜兼
知以為永例。符到奉行。延暦十一年三月十八日

御間城入彦五十瓊殖天皇。御諡ハ崇神天皇○考之國史ニ。上ニハ謹案日本紀云ヘ○求之家記。家記トハ上ニハ延暦八年為有私事各進記文。各トハ高橋安曇二氏、私記。此二氏モ同シ乃ち検其家云記云など云へるも。共ニこの氏文の事ニて。その名目ハ換ちる文飾なり○時経五代歳逾二百。五代の下。二本ともニハ一字空ちる。ちふらば歳字在べきところなり。もしくハ蠹食などちる跟を餘ちゐるものなる歟し。今さら に補ふ。又二百を一本に三百と作るハ訛なり。さて経五代とハ。景行天皇より應神天皇ニいたる五代を

経といへるなり。上の勘文ハ以へる。高橋安曇の祖々ハ仕奉り始し。御代の懸隔をいへる文なり歳逾二百とハ五代の御世二百三十九歳なるを。大数をもて作る文なり○延暦十一年三月十八日。第一章加書の尾ニハ。延暦十一年と記ちるハ此勅判の年ニて。其時此官符を写副ちるものなるへき事。彼處ニハ云へるがごとし。さて此時ハ事ニ。後紀ニハ載らちるべきを。当時の類聚國史ニハ。延暦十一年三巻ハ以ニ闕て傳ハらば月壬申。流内膳奉膳正六位上安曇宿祢継成於佐渡國。初安曇高橋二氏常争供奉神事行立前後。是以去年十一月新嘗之日。有勅以高橋氏為前。而継成不遵

詔旨。背職出去憲司請誅之。特有恩旨以減死と見え
さ。但し必ず要略の本ぞもふ。三月十九日と作れ
きど。類聚國史は三月壬申とある故。通暦をもて推
考るに。壬申は十八日なり。然ればば九と八の訛なる
事著き事なり。必ず訂正して書り

終

昭和六年十月十八日謹寫了